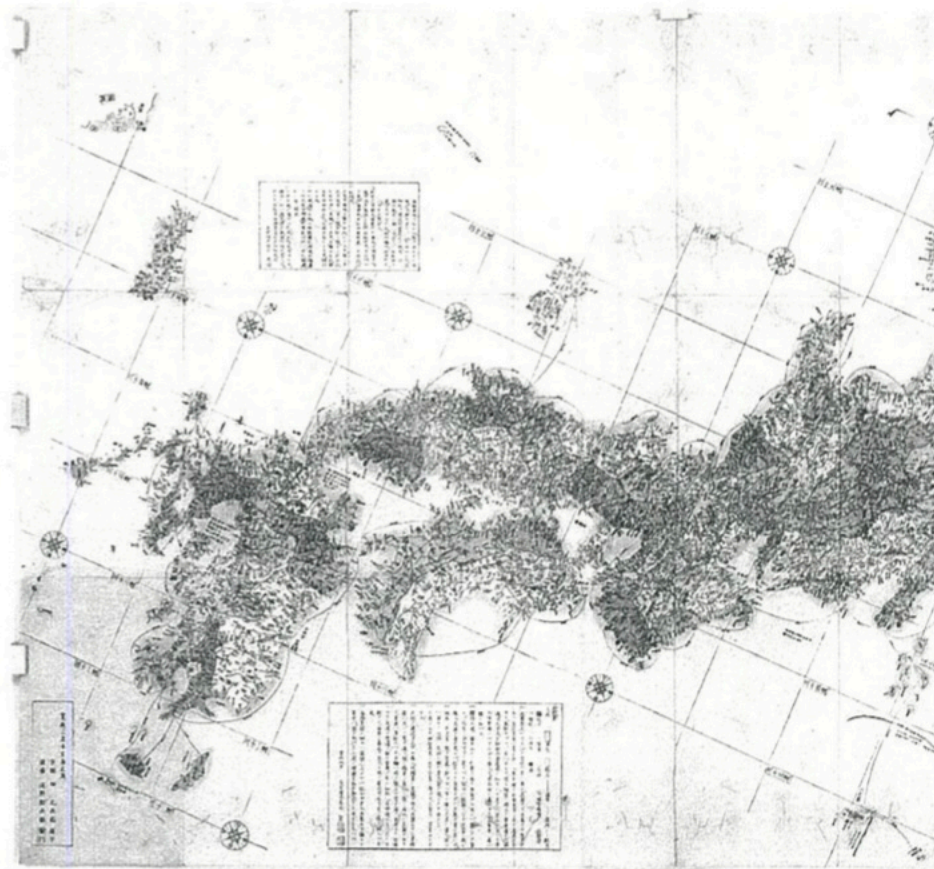


江戸中期に83年生きた長久保赤水は、農民で日本地図を編集した。儒学者でありながら地図などを書いた。赤水の人生を追いながら、関わった

特集 長久保赤水



改正日本輿地路程全圖 協力：高萩市教育委員会

水戸藩の農政改革などに力を発揮

治保の先生に

赤水は六十歳のとき、松岡郡奉行、皆川教純の推薦を受け、二十六歳の六代藩主治保の侍講となった。治保は水戸藩中興の祖として、藩の行財政改革を推し進めた人物として知られている。そのプレーン

の一人が赤水だった。赤水は江戸小石川の儒学者長屋に住み、講義をしながら、さまざまな助言を行った。五代宗翰のころ、水戸藩は大きな借金を抱えていた。京都の公家から正室を迎え入れたこと、江戸屋敷を新築したことなどが大きかった。行財政改革に取り組んだが思うようにいかず、それを息子の治保が引き継いだ。

これまでのやりかたではうまくいかないと思った治保は、新しい

戸藩士なども含め総勢二十一人で引き取りに行ったのだった。長崎では中国人と筆談をし、漢詩の交換もしている。長崎の人たちは水戸藩の学問レベルの高さに驚いた、というエピソードが残っている。「姫宮丸」と同じように小名浜の「住吉丸」の乗組員三人も一緒に帰ってきていて、赤水が流された経緯やベトナムでのことなどを聞き取っている。

その死

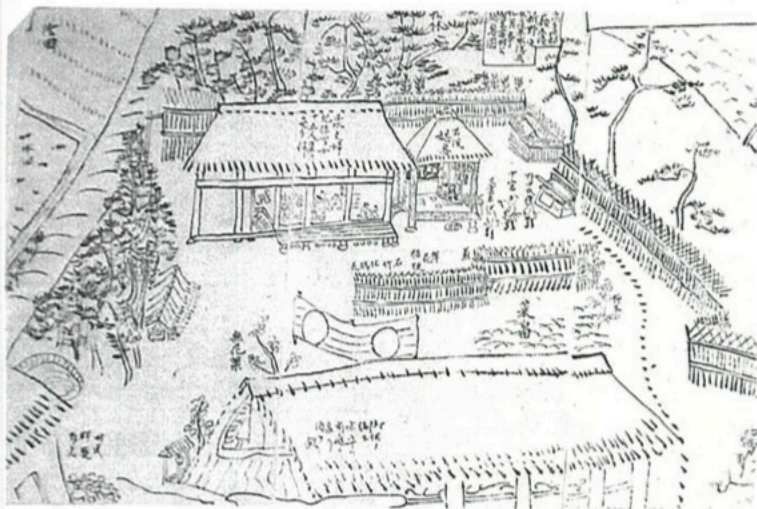
血を入れることを決意する。そのなかの一人が、農民出身の赤水だった。それをきっかけに商人の出である藤田幽谷(東湖の父)などが抜擢され、水戸藩の学問的土台が築かれていく。その結果、門閥至上主義が見直され、新しい時代へと向かっていくことになる。そうした治保の思い切った取り組みが、幕末での特徴的な水戸思想を育み、孫の九代藩主斉昭へと引き継がれていく。

治保は寛政の改革を主導した松平定信の老中就任をバックアップし、藩では農村の振興策や間引き防止策、学問奨励などを積極的に行った。その中核にいたのが赤水だった。赤水は年貢取り立ての改善などが入った「農民疾苦」を治保に直訴するなど、積極的に提言を行っている。

のときから住んだのが私の家で、七十三歳のときまで江戸でも暮らしていた妻と一番上の孫と一緒にいた。前の家には長男がいました。私は勿来から長久保家の婿に入ったのですが、赤水から数えると八代目に当たります。赤水の母は、日頃から嫁いできました。赤水は、その母が持っていた本で勉強したといひます。継母は北茨城の関南町上岡の農家出身で、学問はなかったらしいのですが夫(赤水の父)に頼まれ、夫亡きあとも実家には戻らずに赤水の面倒を見ました。あまり裕福でないなかで、約4km離れた私塾に通わせました。

赤水は七十四歳で侍講の職を離れたが、『大日本史』の地理志編集を命じられて江戸や水戸で作業を続けた。そして八十歳のとき、心配する息子たちの意見に従って赤浜に戻った。自らの家を松月亭、次男四郎次の家を攝梅堂と名付けて、妻と老後を送った。号の「赤水」、字の「玄珠」は荘子の天地篇にある「黄帝、赤水の北に遊び、崑崙の丘に登って、面して南方して還帰し、其玄珠を遺せり」から取られている。

一八〇一年(享和元)七月二十三日、老衰のために八十三歳で死去。戒名は知徳院勇健日照居士。墓はいまも、松月亭の近くにある。さらに死後の一九一一年(明治四十四)、『大日本史』がその五年前に完成したこと、地理志編集の功績で従四位が追贈された。その死から百十年が経っていた。



松月亭図(部分) 国立国会図書館蔵 協力：長久保和良さん

赤水は両親と弟を早く亡くしているし、体が弱かったこともあって健康に注意していたようです。江戸に出たあとも、「健康食としての食用菊や焼き梅などを送って」と手紙に書いたことが、記録として残っています。だから八十三歳まで生きられたのでしょう。性格的には、とても温和な人だった、と伝わっています。